
リンダの翼

当麻 紫苑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リンダの翼

【Nコード】

N4434I

【作者名】

当麻 紫苑

【あらすじ】

カストール公爵領では少女リンダが皇都行きの決意を固めていた。一方皇都アジエでは皇子アリオスが鬱屈とした日々を過ごしていた。さらにはアリオスをめぐる者たちも水面下で動き始める。ふたりの出会いは無事成されるのか

序章 カストールの哀しみの鐘

サン・ユンは遠くから微かに響いてきた鐘の音に気付いて眉を上げた。独特の鳴らしかた、どこか物悲しく聞こえる音…

カストール公爵が治めるこの地方で、鐘の音が響く。これが指す事柄は、一つしかない。皇都アジエで、皇族の誰かがこの世を去ったということ。

サン・ユンはこの森からは遙か遠くにある皇都アジエの方角を見た。そして 森ノ民 特有の死者を悼む仕草 右の手のひらで右目を隠しながら、左の人指し指で閉じた左目のまぶたに軽く触れる をした。

その間も、鐘の音は響き続ける。

この、哀しみの鐘 が響いたこの日がリンダ そしてアリオスにとつての運命の一日であったと言えるのかもめない。

序章 カストールの哀しみの鐘（後書き）

十三番目の騎士 後の時代の話です。主人公はリンダ。サン・ユンは…しばらく出ない予定です。

間章 皇都アジエの鳴動・1（前書き）

アリオス：リクスル皇国第一皇子

ルイシア：リクスル皇国第一皇女

アスエル：リクスル皇国第二皇子

アヴィーナ：リクスル皇妃、ルイシアとアスエルの生母

ユリア：アリオスの生母、側妃

アデイス：カストール公爵、皇室補佐官

間章 皇都アジエの鳴動・1

リクスル皇国、皇都アジエ

皇宮カルメルの皇王ユリシス・タル・リクスルとその家族たちの住まう内宮のひとつ、皇妃宮

「…おまえにまかせた例の件は大丈夫なのね？」

「はい、皇妃殿下。お任せください。この足でわたしはカストールに戻ります」

「そう おまえは二年ぶりに領地に戻るのね。」

皇妃宮の主、アヴィーナ・タル・リクスル皇妃は疲れた顔で相手

トール公爵アデイス・レイ・ヴィランを見た。

「はい、殿下。これを機に、息子も連れてくるつもりでいます」

「そういえばおまえの息子は今年から学院に入学する年だったかしら？」

「来月、十三歳になります。月日が経つのは早いものです」

アデイスの言葉にアヴィーナは深く頷いた。

「ルイシアも、アスエルも、……アリオスも本当に大きくなったわ。ルイシアは、病気がちだった身体が近頃はすっかりよくなり、アスエルは身体は弱いけれど、心優しい、兄弟思いの子になってくれた。アリオスは……」

アヴィーナ皇妃はふと遠い目をした。

「アリオスは、日に日にユリアさまに似てきている…あの方に生き写しの面差しになった…。アデイス、わたくしはね、子どもの頃ユリアさまのことが本当に好きだった。あの方のようにになりたい、そう思っていた。そんなあの方の御子であるアリオスの瞳は、陛下譲りの紫の瞳 リクスル皇家の色。けれど あの子は、ユリアさまのまなざしを頂いたようね。あの子の目をのぞくと、時々あの子が

「ユリアさまに見えるときがある…」

「……………」

「アリオスは、ユリアさまがお隠れになられてから変わってしまった。無口だけれどユリアさまに似て心根の優しい子に育っていた。

…それが今は…」

暗い目つきになった皇妃に、アデイスは何か言おうと口を開きかけたが、今のアヴィーナに慰めの言葉は通じないことに気づき、黙って控えた。

「…ごめんなさい、感傷にひたっているときではないわね。…アデイス、そう、その娘の名前は何と言うの？」

しばらくしてアヴィーナは我に返ったのか、控えていたアデイスに無理に明るく笑いながら話し掛けた。アデイスはゆっくりとその名を口にした。

「リンド　　リンド・ベルデです、皇妃殿下」

間章 皇都アジエの鳴動・1（後書き）

読み直したら意味不明だったので大幅改稿しました。ごめんなさい
ヒルダさん…あなたの出番はまだあります。

次話予定タイトルは「皇都アジエの鳴動・2」です。
ルイシア皇女、アリオス皇子の話になる…はずです。

間章 皇都アジェの鳴動・2

皇宮カルメルの、第一皇子宮

「皇子殿下」

皇子宮、第一皇子アリオス・エル・リクスルの私室に、ためらいがちに声がかかった。第一皇子の数少ない召使のひとり ラウ・リベルの声だ。

「…皇子殿下」

私室に入ったラウは、長椅子に腰掛けて、恐ろしく分厚い本を読んでいる主に再び声をかけた。

「…なんだ」

ラウの呼びかけに答えた主 第一皇子アリオスは父譲りの、リクスル皇家の紫の瞳をラウに向けた。

今年十四歳になるアリオスの顔にその年頃の子どもが浮かべる無邪気な表情は微塵もなく無表情に近い顔つきだ。父ユリシス皇王譲りの紫の瞳を持つアリオスだが、顔立ちやまなざしはむしろ生母ユリア似と言われていた。

アリオス・エル・リクスルは皇王と皇妃アヴィーナとの間に生まれた御子ではない。皇王と今は亡き側妃、ユリア・エル・リクスルとの間に産まれた御子だ。皇子として認知はされたが皇室規範に従い、アリオスは十歳までルヴァンにあるクルテア離宮で十歳まで母と離されて養育されていた。十歳の誕生日に皇都アジェに帰還して初めてリクスル皇家の家族 父ユリシス皇王、義母アヴィーナ皇妃、腹違いの姉ルイシア皇女、同じく腹違いの弟アスエル皇子、そして生母ユリア側妃に引き合わされた。

そのあたりの経緯やアリオスの母、ユリアのことは後々語るとして

「殿下：姉君、ルイシア皇女殿下がお見えでございます」
ラウの言葉にアリオスは眉を上げた。

「姉上が？…なぜ」

「理由は存じませんが…皇女殿下はお一人で参られたようで…」

「…分かった。お通ししろ」

「はい、皇子殿下」

しばらくして第一皇女、ルイシア・オズ・リクスルは皇族の礼をし
て入出した。

ルイシア皇女はユリシスとアヴィーナとの間に産まれたれっきとした
正統血統の皇女、リクスル皇家の長子である。アリオスの二つ上
の腹違いの姉に当たる。この年頃の少女なら母の違う腹違いの弟を
この年の少女なら疎むだろうに、ルイシアはアリオスをもう一人の
弟、ユリシスとアヴィーナの御子である第二皇子アスエルと同じよ
うに心から大事にしていた。

アリオスもまた、この心優しい姉を彼なりに愛そうと努めていたか
らか、

「姉上」

アリオスは入出した姉に礼を返すと椅子を勧めた。無表情だがその
仕草には親しみがこもっていた。

「アリオス…あなた、お母さまが付けてくださった侍女たちをすべ
て拒否したのは本当なの？」

勧められた椅子に座ったルイシアは困惑した顔つきで弟皇子に問い
かけた。アリオスはラウにお茶の用意を命じると、姉の問いに頷い
た。

「あなたももう十四歳、しきたりは理解できるでしょう？わたした
ち皇族は侍女たちが付けられるのが慣例なのよ？」

「はい、姉上。ですが…俺は侍女は要りません。ラウや下男、下女
たちがいるだけで充分過ぎるくらいです」

アリオスはルイシアに淡々とした口調で答えた。べつだん、あたたかみのない冷ややかな口調ではなかったがアリオスはきっぱりと姉に言って姉の、自分と同じ紫の瞳をひたと見据えた。

間章 皇都アジエの鳴動・2（後書き）

鳴動の二話目です。次もルイシアとアリオスの会話です。

次話予定タイトル「皇都アジエの鳴動・3」で、鳴動は次か、その次で終わりになる予定です。

間章 皇都アジェの鳴動・3

「あなた…カルメルに来てから何度お母さまのお心遣いを拒否しているか分かつてるの？」

ルイシアはアリオスの煙るような紫の瞳にたじろぎながらもやや厳しく問いかけた。

「……俺は、クルテアでは身の回りに人を置きませんでした。それが必要だと思うことなく育ちました。…カルメルに来て、第一皇子として振る舞わなければならぬことは理解していたつもりです。けれど…大勢の人間に囲まれていたら………なんというか、ここが苦しくなるんです」

アリオスはルイシアに問われてからしばらくしてぽつりと答えた。元々無口な彼にしては饒舌で、胸をとんと叩きながら答えたアリオスの答えにルイシアは目を瞬かせた。

「……ユリアさまが」

その名前 を聞いてアリオスは僅かに目を細め、伏せた。

「亡くなられてからよね。あなたが周りに人を置くのを嫌がり始めたのは。あなたが拒否する理由はそれなのかしら？」

「……」

「お母さまはね……ユリアさまが亡くなられてからはご自分があなたの母代わりになろうと努めているわ。あなたによかれと思いい心を砕いてあなたに母として接している……あなたもお母さま、アヴィーナ王妃殿下に母として接しなければならぬ。今のあなたはお母さまのお考えを踏みにじっていることが分からないの……？」

ルイシアは努めて冷静に語っていたが、アリオスには姉が静かに怒っていることが察せられた。

リクスル皇王の三人の子どもたちは美貌の持ち主ではあったが、三

人とも気難しい性格の持ち主でもあった。それが顕著に表れているのはアリオスである。…とはいえ彼は出生のことがあるので仕方のない一面もあるだろう。

アリオスの腹違いの弟にあたるアスエル皇子、リクスル皇太子である彼もまた内気で引きこもりがちな少年であった。今年、十一歳になるアスエルはユリシスとアヴィーナの長男、正統血統の皇子になる。そのため兄皇子を差し置いて皇位継承権第一位の地位を与えられていた。だがアスエルは聡明ではあったがふたりの兄妹には劣っていた。加えて身体も強い方ではないために次期皇王の頼りなさに不満の声をあげる声も少なくない。

アリオスは皇宮に戻って四年にも満たない。しかし彼の頭脳の優秀さには王立学院の選ばれた教師たちの舌を巻くほどのものがあり、武芸に関しても今は亡き先代リクスル右府将軍、ダルク・タル・リクスル 皇王ユリシスの双子の弟だ を彷彿させる才能の片鱗を見せつつあった。現在、アリオスが成人の儀を迎えたら右府将軍の地位に就く話もカストール公アデイス、左府将軍ルイ ドらのもとで内々に進められている。容姿に関して言えばリクスル皇家の紫の瞳と黒髪を持ち主だ。リクスルを含め、周辺諸国にも黒髪を持ち主はほとんどいない。…黒髪は<森ノ民>の血をひく証であるからだ。

<森ノ民>とは森で一生暮らし、一族以外の者とは結婚せず、滅多に人里に現れない者たちのことを指す。<森ノ民>は黒髪と緑の瞳を持ち、それは他の国の者たちはけっして持たぬ色だ。だがその、<森ノ民>の中にはまれに一族以外のものと添い遂げる者もいる。一族を離れ、捨てた彼ら<ハナレモノ>の子は、黒髪や、緑の瞳を持つて生まれる可能性が高くなる。…アリオスの母、ユリア側妃は生粋の<森ノ民>だった。アリオスが皇宮に戻った当初はその黒髪を人々は好奇の目で見たが、やがて<森ノ民>の黒髪と、リクスルでは至高の色とされる煙るような紫の瞳のふたつが、逆に神秘的な雰囲気のアリオスに纏わせたのかアリオスは美貌の皇子として人々

に受け入れられた。むろん、<森ノ民>を卑しい身分の者と侮蔑し、アリオスのことを軽視する者もいたが。

ルイシア皇女はユリシス皇王の長子、第三皇位継承者だ。年はアリオスより二歳年上であり、王立学院に通う才女でもある。難解なローディア語に通じ、訛りのない美しい発音で会話をすることができるところであった。ローディアとは現在<聖女王>の敬称で呼ばれる女王オクタヴィアの治めるリクスルの友好国だ。女王には双子の子ども、イリス王子とユーニス王女があり、イリス王子が王位継承者である。

リクスル皇族たちは代々紫の瞳をもって生まれる。

髪の色はさまざまだが大抵は金髪であり、アリオスのような黒髪は通常ではありえなかった。ルイシアとアスエルは金髪の持ち主だ。二ヶ月後に十六歳の誕生日を迎えるルイシアは両親の美質を受け継いだ少女だった。ユリアを敬愛し、第二の母と慕っていたルイシアは腹違いの弟のアリオスのことも心から大事にした。…だが彼女自身にはどこか冷めているというか人嫌いな部分も心にあつた。皇女宮の侍女たちも自らが選び、ルイシアの不興をかった従者たちは他の宮殿に回されてしまった。…とはいえ臣下たちに慕われている皇女の不興をかう者というのは、大抵位の高い者であり、下位の者に差別的に振る舞う貴族意識の高い者であつた。特にルイシアは森ノ民の血をひくアリオスを侮辱されることを殊のほか嫌つた。

それを知っていたアリオスは今まで姉の意に背くことはあえてしなかった。アリオスはこの、皇国の皇女としてふさわしい振る舞いを周囲に見せて満足させてはいるが実は人の心の機微を鋭くさるところができる、繊細な感性をもつ姉が好きだったのだ。

たがらこそ、ルイシアの苦味をはらんだたしなめは心に響いた。だが：アリオスにも譲れない部分はあった。

「申し訳ありません。俺は：母上のお心遣いを踏みにじりました。でも：俺はやはり人を側に置きたくない。母が死んで、人が側にいるということがたまらなく嫌になったのです。母が死んで俺は皇子宮で母への：森ノ民の血をひく側妃への中傷を幾度となく耳にしたのです。：酷い言葉ばかりでした。俺と母が皇宮すべての人間に受け入れられることはないのはアジエに戻り、カルメル入りをしたときから分かっていたつもりだった。けれど俺は、そのとき宮廷の悪意に触れて傷つくと同時に、カルメルでユリア母上に守られていたからそれまで周囲の好奇心や悪意にさらされることも、危険な目に遭うこともなかったのだというのを思い知った。自分がいかに無知で、幸せな感情の持ち主だったかを身をもって知った。そして：人とはこんなにも残酷なのか、それを知らなかった自分はなんと愚かだったのか。そう考えるようになってから……：なんとというか、心がさめてしまいました」

アリオスは一貫して淡々とした口調だったが、心が激しく揺れているのは言葉遣いの変化でルイシアには伝わっていた。

（これはこの子の心だ。二年間封じ込めてきたこの子の、心の叫びだ）

ルイシアは二年前にアリオスと引き合わされてから初めて弟の本当の想いを聞いた気がした。こんなにも真っ直ぐに弟が自分に想いをぶつけたことは今まで無かった。

アリオスの煙るような瞳が自分を映しているのにルイシアは気付いた。わたしの答えを待っている。真剣に言ってくれた弟に自分も言葉を返さなければ。ルイシアは口を開きかけたが、言葉が直ぐには出てこなかった。

「あなたが」

やっと出てきた自分の声がか細いことに気づかぬままルイシアは続けた。

「人を側に置かなくなった本当の理由はそれなの？」

「多分」

そう答えたアリオスの顔は、迷子になった子どものようなようだった。ルイシアは目を見開いて弟を見た。アリオスは煙るような瞳でルイシアの様子をながめて、どこか諦めきった表情を浮かべた。

「姉上に分かっていただけの理由だとは自分でも思いません。とても自分勝手な、愚かな理由でしょう。でもきつと…母が死んだとき、俺の心は死んだ。許してください、姉上。…許して…」

アリオスは、無表情を装ったがルイシアには最後の許して、という言葉を使ったときのアリオスに十三歳の幼さを見た。

ルイシアはこのときようやくアリオスがまだ十三歳の親に守られなければならぬ子どもであったことを知った。

同時に、アリオスの時間がユリアが死んでから止まり続けていることも

間章 皇都アジエの鳴動・3（後書き）

鳴動編の3です。アリオスとルイシアの話はこれで終わり、次話は鳴動になるか、一章に入るか検討中です。

設定ミスがあり、改稿しました。

ローディア女王はユーナ オクタヴィアです。

これから話を続けていくと矛盾する部分があることに気付いたので変更しました。ごめんなさい。

世界観としてはユーナの時代からはかなりの時が流れている…という事で。

オクタヴィアは暫く出ませんが…

予定タイトルと登場予定人物を載せておきます。人物たちは名前だけ…（次章に登場する方々です）

- 一章 帰郷
- 二章 目指すは皇都アジエ
- 三章 皇宮カルメル
- 四章 サリユートの咲く庭で
- 五章 アース
- 六章 皇女ルイシア
- 間章 アウル
- 七章 未定（ ）
- 八章 遠乗り

間章 アスエルの日々

九章 第一皇子生誕祝祭

十章 雪見

間章 オルラーヌ

十一章 未定（ ）

十二章 ローディアの王子

：まだタイトルが決定していません。

次章登場予定人物

リンダ・ベルデ

ナイゼル・ヨナ・ヴィラン

ソフィア・マルキア

リーナス・セオ・アルヴィトー

アデイス・レイ・ヴィラン

アントーニア・アルヴィトー・ヴィラン

ユリス・ベルデ

一章 帰郷・1

リクスル皇国は大陸南部の肥沃な土地を有する強国である。周辺諸国を挙げてみるとローディア、ライドール、セルイアなどがある。カストール公爵アデイスが治めるカストール地方は皇都アジェから馬の足 もしくは馬車 でだいたい二日の距離だ。かつては皇領であったカストールは湖と森林が大部分を占める領地であり、王侯貴族の離宮、別邸もちらほらと点在している。

そんな中でひとときわ目立つ美しい城館が建っている。カストール公の居城、フェ ルン城だ。

フェ ルン城に住むカストール公爵の直系の家族は少ない。もともとカストールのヴィラン家が驚くほど少子な家系で、カストール公アデイスの家族は母、妻に息子一人、従弟の忘れ形見の娘、従弟の妻だけである。アデイスには兄弟はなく、夫を無くしたアデイスの母のシルヴィアはカストールの山奥にひっそりと建つ別邸に隠居している。

フェールンに住むヴィラン家の五人を簡単にまとめてみるとアデイス・レイ・ヴィラン。カストール公爵、皇室補佐官。ヴィラン家当主であり第十四皇位継承者でもある。アデイスは先代皇王オスカーの従兄の子であるからだ。茶髪に青い瞳の持ち主だ。

アントーニア・アルヴィト ・ヴィラン。カストール公爵夫人。隣国ローディアの女王オクタヴィアの従妹である。アントーニアの生家はローディアの名門アルヴィト 家だ。

かつてローディア宮廷を従姉オクタヴィアと共に騒がせた美貌の持ち主で亜麻色の髪に金茶の瞳の持ち主だ。

ナイゼル・ヨナ・ヴィラン。カストール公爵アデイスの息子。第十七皇位継承者。今年十三歳になるナイゼルは王立学院に入学することが決まっている。リクスル皇家とローディア王家という至高の血

をひく稀有な少年である。容姿は母親似の美しい顔立ちで瞳だけは父の青を受け継いだ。ゆえあつてごく親しい者だけがナイゼルを<ヨナ>と呼ぶため、表記は<ヨナ>で今後統一する。

リンダ・ベルデ。ヨナの又従姉に当たる十二歳の娘だ。父のヨナ・ベルデ（ナイゼルのミドルネーム兼愛称のヨナ）はヨナ・ベルデをあやかっただけのもの、母がつまりリンダの祖母がアデイスの父の妹であるためにアデイスとは従兄弟同士になる。ヨナ・ベルデはリンダが七歳の頃に病死してしまっただけだ。母のユリス・ベルデが森ノ民であるためリンダはリクスル人と森ノ民のハーフになる。森ノ民の象徴の黒髪と緑の瞳をユリスから受け継いだリンダは容姿は完璧な森ノ民に見えた。リンダの母ユリスは美貌の持ち主であり、娘のリンダは幼いながらも母の美貌を受け継いでいた。ただ、眉の形や目もと、当惑したときにぎゅっと引き締める口もと、ヨナ・ベルデに驚くほどそっくりだった。リンダは父を亡くしてからアデイスとアントーニアの娘として養女になり、公爵令嬢としてフェールンで養育されている。

アデイスはそこまで読み終わると目を馬車の窓から見える風景に向けた。

視線の先には今の季節に咲く、サリユーの花が鮮やかに咲き誇っているのが見えた。穏やかなカストールの風景が広がっている。いつの間にかカストール公爵領に入っていたようだ。

再びアデイスは手元の書類に視線を戻した。皇妃アヴィーナの依頼のために作成したカストール公爵家についての書類だった。今読んだところまでは、だが。……そこから先はリンダ・ベルデについて詳細に記されていた。

(リンダ)

まだ幼い娘の輝く緑の瞳が脳裏に浮かんだ。これから言わなければならぬことは、幼い娘にとっては過酷で辛いことだった。

「おまえを、アリオス殿下を巡る嵐に巻き込まなければならぬな
つてしまうとはな……」

アデイスは何回も繰り返して呟いた言葉を口にした。

しばらくまた窓に視線を向けていたアデイスはふっと視界の端に白いものが映ったことに気づいた。まだ距離があつたが、あれは

「…フェールン」

戻ってきた。

実に 二年ぶりの帰郷だった。

一章 帰郷・1（後書き）

殆ど説明文：リンダは次は絶対出ます。

リンダの出生関連はぼかしてありますが、いずれわかるでしょう。

何故リンダの父ヨナ・ベルデの父親は触れられていないのか？など…

補足：シルヴィアという名前はこの大陸ではよくある名前です

一章 帰郷・2 (前書き)

リンダ・ベルデ：カストール公爵の養女。十二歳

ナイゼル・ヨナ・ヴィラン：カストール公爵子息。リンダの又従弟。
十二歳

ココ・クル：フェールン城の下働きの少年

一章 帰郷・2

闇の中で『それ』は静かに覚醒した。

『それ』は緩慢な動作で瞳を動かすとそこが自らが寢床と定めている場所であることを確認し、再び目を閉じた。

今、く視えたゝものは『それ』の探究心をおおいに刺激するものだった。

「くあの子ゝと、く輝く日の御子ゝの運命が、動き始めた…」

これだから、人間には飽きない。『それ』はぼんやりとした意識の中で思う。自分たちよりも脆弱で、愚かな存在なのに、時々自分たちをハツとさせるようなことをあつさりしてしまう。

「これもくあの方ゝの気まぐれか…はたまた別の方々の御意志なのか…」

まあ、いい。『それ』は薄く笑った。

運命が動き始めた。

変革が、始まる。

ココ・クルは朝の爽やかな空気の中で鼻歌を歌いながら正門前で箒を動かしていた。ココの仕える城館・フェールンは賑やかになり始めていた。この城に住む貴族の朝は意外と早い。二年前から皇都アジエに行っている主人が不在でもそれは変わらない。

ココがしばらく石畳を掃き清めっていると、視界の端にキラッと光るものが映った。

「んっ？」

ココは目を瞬かせると緩やかな丘になっている前方を見回した。今の季節では見慣れた、サリユーの花が道のあちこちで咲き誇っている。

「んー気のせいかな？」

ココは手を止めて再び見回した。…と、丘の方で再びキラツと何か光る。

「まただ…あつ…」

ここからではまだ点のようにしか見えないが、あれは、あの紋章は

「だ、旦那さまの馬車だ…。旦那さまの、お帰りだ…」

箒を落としたことに気づきもせずココは震える声で呟いた。

「あ……………」

さつとココの瞳に歓喜の色が宿った。くるりと身を翻しかけ、慌てて箒を拾い上げると一気に走り出した。

門をくぐり、ココは城館の裏手の使用人用の入り口をすりりと通り抜け、一番近い厨房に飛び込み、忙しそうに働く人々に向かって声を張り上げた。

「帰ってきた、旦那さまが、帰って来たよッ！」

それだけ言う和使用人たちの反応を見ずにココは厨房を出て使用人棟とヴィラン家の人々の住む棟を繋ぐ通路へ向かった。…厨房からはどよめきが聞こえ、やがてそれは歓声に変わった。

通路を通りながらココは興奮して上気した顔のまま、大声を出した。

「ヨナさまあ、リンダさまあ！旦那さまがっ、旦那さまが、お帰りになりましたよっ！」

ひんやりとした通路にココの声が響いた。

リンダは、遠くから微かに聞こえてきた言葉に自分の名前があることに気づき、本から顔を上げた。

「ココ…?」

リンダは眩き、しばらく耳をそばだてていたがもう声は聞こえてこなかった。リンダは本に視線を戻したがさっきの音が気になり、集中できなくなったので本を閉じて腰掛けに置くと私室の扉へ向かった。すでに寝巻きではなく、室内着に着替えている。扉に手を掛けかけたとき、コンコン、とノックが聞こえた。

「誰？」

侍女長のソフィア・マルキアが現れるには少し早い。時計を確認したから確かだ。神出鬼没、変わり者と言われている個人教師のリーナスだろうか。彼なら突然の来訪もやりかねない。

「僕だよ」

予想外の人物の声にリンダは拍子ぬけしたが扉を開いた。

「ヨナさま…」

同い年の又従弟、ナイゼル・ヨナ・ヴィランのあどけなさを残した、母親似の顔が目に入ってきた。

「おはよう、リンダ姉さん」

ヨナは父譲りの青い目をキラキラさせて挨拶した。リンダちよっと眉を上げた。…この美しい又従弟が自分を姉さん、と呼ぶときは必ずく何か>があるのだ。

「おはよう…どうしたの？」

「ココの声、聞こえた？」

「ええ…」

「ココがいい知らせを持ってきてくれたよ。父上が、帰ってきた」
ヨナは青い目にどこか面白がっている光を浮かべて、にやっと笑った。

一章 帰郷・2（後書き）

やっとリンダとヨナさまが出ました

冒頭のお方は…いずれ正体は分かります。ある意味ではこの話のキー・パーソンなので…

次話はヴィラン家の穏やかな日常＋アデイスが皇妃アヴィーナの依頼を明かす…みたいな感じになる予定です。

あ、お気に入り登録をしてくださった方々、ありがとうございます
！感謝です…。

感想もお待ちしています。

一章 帰郷・3

扉から響いたノックの音にアデイスは目を通していた書類から視線を上げた。

「どうぞ」

「失礼します。旦那さま」

入出したリンダは丁寧な頭を下げ机に向かっていたアデイスの前に立った。

「お呼びでしょうか」

「すまない。こんな夜更けに呼びつけてしまって。…そこに掛けなさい」

アデイスはリンダに席を示し、自らもリンダの正面にあたる席に腰掛けた。

フェルンの主アデイス・レイ・ヴィランはココがふれまわったように、約二年ぶりに城館に戻った。早朝の帰りだったために城中でんやわんやの騒ぎになったがアデイスは家族たちに挨拶し、朝食も共にしたがその後食事もそこそこに書齋に引き籠もってしまった。アデイスの慌ただしいさまにリンダやヨナも拍子抜けしてしまったが、書齋を訪ねたが侍従に柔らかな物言いであったが、追い返されたのだ。侍女長のソフィアに促されてしまったのでそれぞれに予定に取り組まざるをえなかった。ふたりの予定とは国史や数学などの講義やダンス、芸術など一般教養の勉学を受けることだ。といってもそれぞれ別の教師に教えを受けているため一緒に授業を受けているわけではなかったが。ふたりがともに受ける講義と云えば、ふたり専用の個人教師のリーナス・セオ・アルヴィトの講義だけだろう。

リンダもヨナもけして暇なわけではなかったため、結局は胸に疑問を抱いたまま一日を過ごすことになったのであった。そしてアデイス

ス、そして奥方のアントーニアもなぜか夕食に姿を現さなかったため、リンダの疑問は深まるばかりだった。母のユリスに問い掛けても煮え切らない、おざなりな言葉しか返ってこなかった。リンダはとりあえずは好奇心を胸に押し込んだのだが

ともあれ。

夜になり、私室に戻り、寢床に入ろうと侍女たちをさがらせたリンダをそつと訪ねてきた者がいた。

「え…旦那さまが私を？」

「はい、リンダさま」

微かに緊張した声で答えたのはアデイスつきの侍従のミシエル・マルキア（ソフィアのひとり息子だ）だった。

ミシエルは、茶色のふわふわした巻き毛にぱっちりとした目のという可愛らしい容貌の少年だ。ややきつい顔立ちのソフィアにまるで似ていないミシエルだったがまだ十四歳なのにも関わらず、アデイスつきの侍従として勤めていた。ミシエルも皇都にアデイスの侍従として同行していたため、リンダも顔を見るのは久しぶりだったのだ。ミシエルは礼儀正しく夜遅くにたずねた非礼を詫び、再会の挨拶を述べた後にアデイスがリンダを内密に呼んでいる旨を伝えた。

「すぐに行くわ。…ああでも寝巻きのままなの、少し待ってくれない？」

ミシエルはなぜか僅かに視線をそらして話を聞いていたが、その言葉に目をリンダにそろりと向けた。ミシエルは頷きかけたがふと頬を染めて「お待ちしています」と言っただけでまた目をそらしてしまった。

「さて…リンダ。こんな夜更けに話を聞くのは辛いだろう…だが少々長い話をしなければいけない」

「すまないね、といったアデイスにリンダは慌ててふるふると首を振った。」

「いえ、旦那さま。私は平気です」

リンダはミシエルから言伝を聞いた時点で、昼間収めた好奇心が心にあふれ始めていたので僅かに表情に好奇心をにじませた。

アデイスはそんなリンダを見てかすかにためらうように目を伏せたが、意を決したのかヨナによく似た青い目を再びリンダに向けた。

「おまえにひとつ、重大なことを頼みたい」

「重大な、こと…」

アデイスはそこで言葉を切り、つとめて無表情になると口を開いた。

「第一皇子、アリオス殿下付きの侍女になってもraitai」

その言葉に、リンダは緑の瞳を見開いた。

同時刻。

『それ』は平伏し、額を地面にこすりつけている彼らに感情の読みえないまなざしを向けたが、ふと微笑んだ。

「そう萎縮しないでいいよ、私はくあの方への気まぐれを告げにきただけだから」

『それ』の言葉に平伏していた者たちに緊張が走った。

「恐れながら…それは」

沈黙を破り、彼らの中で一番前で額づいていた老人ががたがたと震えながら問い掛けた。

「この国に〈あの方〉がささやかな種をまいた。その種を育てるのはふたりの子ども」

『それ』は笑みを消し、奇妙な、どこか遠くを眺めているかのような表情で唐突に口を開く。

「子どもたちのひとりは、アージェに選ばれたく輝く日の御子」。

もうひとり、アルフスに選ばれた　きみの孫娘だ。　　ユン

の族長のサイ・ユン」

言い終えると、『それ』は己の、この世のものではないようなその紅い瞳を老人に向け、謎めいた微笑みを浮かべた。

一章 帰郷・3 (後書き)

補足

アージエ、アルフユス：リンダやアリオスの住む世界の双子の兄弟神です。 < 聖戦ロイア > と共通の神々の名前になります。

「……………」
リンダは自分が、不躰にもアデイスを凝視していることが頭の片隅に浮かんだが意識は別のところに飛んでいた。

（アリオス、皇子さま）

リクスル皇国の第一皇子、第二皇位継承者。そして 側妃の母を持ち、<森ノ民>の血をひく尊い身分の御方。同じ<森ノ民>の血をひくハーフであっても、リンダとアリオスの身分には天と地ほどに差がある。

リンダとて表向きはカストール公爵の娘ではあり亡き父はアデイスの従兄ではあるが 父のヨナは父親の分からぬ私生児であるからだ。

リンダの祖母のリーシェラ・ヴィランはかつて王立学院の秀才として知られた才女であった。学院卒業後に才能を買われ、隣国ローディアの王族の子女たちの個人教師として王宮に召し上げられる名誉を賜ったリーシェラは その二年後、父親の分からぬ子を身ごもったという。

リンダはこの公爵家の醜聞を直接母ユリスやアデイスに聞いたわけではないのでこれ以上の詳細なことは分からない。リンダとてまだ十二歳のほんの子どもでありいわゆる男女の艶事には疎くて当たり前であるし、公爵家ではこの醜聞はある種の禁句であるらしいことはリンダにも理解出来たのであえて話題にはしなかったのだ。リンダがその祖父にあたるという人について知っていることは、その人がローディアのさる貴族の子息だった、ということだけ。

アリオス皇子は<森ノ民>の血をひく妾腹の皇子であっても、大國リクスルの第一皇子である。第一皇位継承者の第二皇子アスエルは

病弱で大きな祝典、儀式がない限り国民の前に姿を現さないことは周知の事実であるので、リクスルの次期皇王位にアリオスが就く可能性は十分にあった。

年は今年で十四歳。皇族としては極めて優秀で、文武両道。大変人目をひく美貌の持ち主である。 リンダがアリオス皇子について知っていることはこのくらいだ。

「なぜ、私が？」

リンダは自分が不自然だと思われるくらいアデイスを凝視していたことを、アデイスの物問いたげな目線で気づき、慌てて口を開いた。口の中はからからに乾いていたようで、引っかかったようなかすれた声が出た。

「…皇子殿下は、母君のユリアさまが一年前に亡くなられてから変わってしまった」

リンダの問いかけには答えず、アデイスは語り続けた。

「殿下はユリス陛下の御子ではあるが、妾腹の皇子だ。皇室規範により十歳までクルテアの離宮で、皇王家の方々と引き離されて養育された。そのせいか 三年前にカルメルに戻られてからもあまり人と関わろうとせず、ひっそりと母君と皇子宮で暮らしていたよ」

「……………」

「だが殿下は決して人間嫌いだったわけではない。無口ではあったけれども、血の繋がらない皇妃殿下や皇女殿下、皇太子殿下を大切にしようとする懸命に努めておられた。慣れない王宮でも第一皇子として不適格だと周囲に思われぬよう常に気を張って…。だが、ユリアさまが亡くなられて殿下はあからさまに人と関わるのを厭うようになっってしまった。…カルメルに来た当初から殿下は侍女や侍従などを側に置くのを好まなくてね。必要最小限の者たちしか側に置いていなかったのだが母君の御葬儀の後、それもひとりを除いて解雇してしまった。だが 仮にも第一皇子の側付きがひとりというのは皇王家の体面もあるし身の安全のこともあったから皇妃殿下が皇

子殿下を説き伏せて、皇妃付きの者たちを少しずつ皇子殿下の側に送り込まれることが決められた。アリオス殿下も了承してのことだった」

「しかし 殿下は結局送られた侍女のすべてを拒んだ。理由は、私には分からない。だが恐らくは何か、殿下の怒りに触れることがあったのだろう、と私は考えているが。事情が事情なのでこれは公にはされていないが、心を閉ざしてしまわれた殿下に皇妃殿下は深くお嘆きだ」

むろん、アデイスもリンダも皇都アジエでアリオスがルイシアに心の内を吐露したことは知らない。

「そこで 私は皇妃殿下に、侍女候補におまえを推薦した」

「私が、この髪と目を持っているから？」

「それもある。だがそれ以上に：殿下はクルテアで過ごしていたときも、そして皇都でも、同世代の子どもと接していない。というより、出来なかつたと言っべきだが……。おまえは殿下と年もそう違わないし、身内の鼻肩目を抜いても気立てのいい、よく気がつく娘だと私は思っている」

リンダはアデイスの思わぬ贅辞に頬を染めたが、ふと疑問が口をかすめた。

「ですが、私の他に候補の貴族の方はいらっしやらなかったのですか？」

「いないわけではない。：有体に言っしまえば、＜森ノ民＞の血をひくアリオス殿下のもとに自分の娘や親族を推す者は少ないのだよ」

「え？」

「リクスルでは、＜森ノ民＞は好奇の目で見られることの方が多いということだ。建国の祖に＜森ノ民＞を持つローディアとは違う。

…もっと言えば＜森ノ民＞を嫌悪する者は、特に貴族階級には多い」
「……………」

リンダには想像することが出来なかった。自分はこのカストールの穏やかな生活に慣れきっているから分からないのかもしれない。アデイスの治めるカストールの民は、少なくともリンダが知る者たちは、純朴で、リンダの容姿にもさほど反応せずに接してくれる。リンダの胸中を読み取ったのか、アデイスは穏やかな声のまま、リンダが想像してすらいなかったことを口にした。

「ここカストールはリクスル国内でも有数の森林地方だからその分僅かだが、森ノ民との交流もある。領民たちも純朴である者たちのことをさほど嫌がらない。だから……おまえにはまだ想像出来ないだろうね。だが貴族にはそう考えぬ者たちが多くいる、ということだ。露骨に嫌悪し、<森ノ民>を侮蔑する者はざらなのだよ。事実、アリオス殿下を第一皇子として正式に国民に発表するのに堂々と異を唱えた者もいる」

「だが殿下は妾腹とはいえリクスル皇王家の皇子、至高の血をひく数少ない高貴な御方だ。それに……殿下の姉君、ルイシア皇女殿下が異を唱えた者に対して激怒されてね。結局その意見は消えたが……」

「ルイシア、姫さまが？」

「そう……皇女殿下は腹違いのアリオス殿下をととても大切に思っている御方だからね。それに、皇女殿下は弟君のが、森ノ民の血をひくから、という理由で非難されるのを殊のほか嫌っているから……話がそれってしまったね。……リンダ」

「はい。旦那さま」

リンダは恐らくは公にされていないであろう皇王家の、アリオスの情報に着いてゆけずに呆然としていたが、アデイスに呼ばれてぴんと背筋を伸ばした。

一章 帰郷・5

「落ち着いて。俺の鼓動を数えて」

「あ……」

アリオスはリンダを胸に抱いたまま、淡々とした口調で言う。

「一、二、三、四……」

アリオスの数を数える静かな声を聞いているうちに、リンダの耳にトクン、トクンと規則正しい音が響いてきた。言われるままに、リンダはアリオスの声を頼りに鼓動を数え始めると、同時にアリオスの腕から伝わる暖かな感触に気づいた。そのやさしいぬくもりが心地よく、リンダはそっと身をゆだねた。

（人間の暖かさ、だわ）

きつと 親に抱かれた赤子というのはこのような感じなのだろう。

「怖がっている人には、これが一番効く」

リンダを腕に抱いたまま、アリオスは呟いた。

「昔、母がよくこうしてくれた。こうすれば……自分は一人ではないと 誰かが側にいることが実感できると……」

アリオスはほんの少し腕の力を緩めるとリンダの顔を除き込んだ。

リンダの緑の目と、アリオスの煙るような紫の目が絡み合った。

「まだまだ子どものおまえにこのような役目を与えるのは酷なこと……。だが私はおまえならあるいは と考えおまえを推した。おまえは私の実子ではないが、皇室補佐官このわたしの養女だ。おまえの後見人と

して私がたてば…おまえを宮廷で守ってあげられる。わが公爵家は宮廷では最高位の貴族だ。表立っておまえを排そうとする者はいないだろう。…どうだろうか」

「…ですが、私は…」

リンダは戸惑っていた。冷静に考えてみると由緒正しき貴族の令嬢、令息が宮廷にあがり皇族クラスの人間に仕えることはこの時代、そう珍しい話ではなかった。ましてや皇室補佐官を代々務めているカストール公爵家の出であればたとえリンダが<森ノ民>の血をひいていたとしても、この話はいずれ自然に出てきたかもしれない。

(私が…皇子さまに仕える?)

今まで想像すらしていなかった話にリンダは途方にくれた。自分が<森ノ民>の血をひいていないただの貴族の娘であったなら己の幸運に酔いしれたのだろうか。…いや、たとえただの貴族の娘であったとしても夢のようなこの話には実感が湧かなかっただろう。

不安も不思議と湧いてこない。そういう一般感覚も超越してしまったのだろうか。リンダはアデイスの怒りに触れるだろうか　と少しためらいながらも口を開いた。

「わ、たしは…そのう…まだ、今のお話はお受けしたらよいのか、分かりません…」

リンダのたどたどしい言葉にアデイスは落胆の色を浮かべずに頷いた。

「そうだね。それが当然の反応だ」

「申し訳　ありません」

「いいや。…これは即決できる類の話ではないからね。今すぐには言わない。私は三日ほどこちらに留まる。…その間に結論を出しなさい。無理を承知でこの話をおまえにしたのだから」

「……はい」

「ただ　もしおまえがこの話を受けるなら、ユリスは了承していることは覚えておきなさい。明日にでも、ユリスと話し合うといい」

「お母さんが…」

「もう、遅い。部屋に戻りなさい」

アデイスは壁に据えられている時計に目をやり、軽く手を振って退出の合図をした。

「はい。…お休みなさいませ、旦那さま」

「お休みリンダ」

「ふうん。　でリンダはどうしたいわけ」

「まだ、迷っています…」

リンダの煮え切らない態度にはさして気にとめなかったのか、ヨナはそう、とだけ言った。

早朝のカストール公爵領の湖キノワ。森林地帯であるカストール公領は、リクスルの三大保養地　カストール、アローク、トルフィアの中でももっとも美しいとされているのがアロークだとすると、カストールはもっとも謎めいた地であると言えよう。

美しい森の中で、<森ノ民>はひっそりと堅実な生活を送り、公領の領民とも細々とだがやり取りもあるらしい。

リンダとヨナはまだ人々が寝静まるフェルンを抜け出し、気に入りの遊び場のひとつであるキノワ湖のほとりまで遠乗りに来ていた。ふたりの寄りかかる大樹の側でリンダの馬のルスタ、ヨナの馬のクアンが繋がれている。

昨夜　アデイスから夢のような話を告げられ、ぼんやりとした面持ちのリンダが部屋に戻ると、部屋の前にはにこりと微笑み、壁に背を預けて立っているヨナの姿があった。

微笑んだまま、「明日の朝、キノワに行こうね」と告げたヨナは呆気にとられたリンダを綺麗に無視してさっさと自室に戻ってしまった。ヨナはリンダが夜更けにベッドを抜け出し、ミシエルとともに

アデイスの私室に向かったことに気付いていたのだろう。微笑んだときのヨナの、一見邪気のない顔がそれを物語っていた。…その可愛らしい顔には長年ともに過ごした家族にしか見抜けぬ有無を言わせない表情が含まれていた。

早朝のキノワ湖は美しい。澄み渡っている湖面が時のうつろいとともに色を変えてゆくのを見ることがリンダは好きだった。ふと目を放した瞬間、湖面は直に色を変えてしまう、そのさまが。

特に今の時期、春のキノワ湖はすばらしかった。湖畔の花々　サリュ、アストリア、イラス、シウリアなどが鮮やかに咲き誇るこの季節がすばらしい色を生み出していた。

リンダとヨナは丁度、美しく咲き誇るアストリアに囲まれながら地面に座ってキノワ湖を眺めていた。きつすぎないやさしい香りを放つアストリアはヨナが最も好む花で、フェルン城のアントーニア奥方の温室の一角でも育てさせていた。

「でも　僕は、もしリンダが皇都に行くことになったら嬉しい」「え？」

ヨナの思いがけない言葉にリンダは呆けた。ヨナは目の前に咲くアストリアを一輪選んで手折るとその、素朴な白い花を手でもてあそびながらだつて、と薄く笑った。

「僕は、来月から王立学院に入学するから。僕は向こうの寮に入寮するから、これからは休暇を頂いたときしかカストールに帰れないだから　もしリンダもアジェと一緒にに行けるなら嬉しいなあ」

そういえば、ヨナは来月から院生になるのだ。皇宮カルメルの一 corner を占める学院は、王侯貴族の子弟たちが集まる学び舎だ。大陸一と謳われる隣国ローディアの、学問の最高峰であるローディア王立学院には劣るものの、国中の優秀な若き学生たちが集まる場所だ。

学院は六年制で、十三歳から十八歳の学生で構成されている。ヨナは今年で十三歳、そして国で最高位であるカストール公爵家子息であるために学院に入学することは早くから決められていた。そして

無類の学問好きであるヨナは入学を心待ちにしていた…。

「ま…僕がどう考えているかはいい。結局リンドはどうしたいの？」
「私は…」

恐らく自分はまだ、自分が何をしようとしているのか分かっていない。純朴なカストール領民と過ごし、貴族ではあるが憤ましく幸せに育ったリンドには、華やかな皇都でアリオス皇子の侍女になる、ということがどうにもぴんとこないのだ。強いて言えばほんの少し皇子殿下に興味がわいたぐらい。

「…ね、ヨナさま。アリオス皇子さまってどんな御方なのでしょう
か」

話題を変えたリンドにヨナは眉を寄せたが、リンドが話を逸らそうとしているわけではないと感じたのか答えてくれた。

「…とても聡明な方だ、と聞いているけれど。文武両道で ああ、とても美しい顔をしているとか」

ふと思いついたように付け加えた最後の言葉を言うとき、ヨナはいたずらっぽい表情でリンドを見た。

「漆黒の髪に、リクスル皇王家の血をひく証である紫の目でさ…今は亡き側妃さまにそっくりな光のような皇子さまらしいよ。」

何、その顔。姉さんったら想像しちゃったの？」

ヨナの言葉を聞きながら頭にアリオス皇子の顔を思い描いていたリンドは、ヨナのからかいの含んだ指摘に頬を染めた。

「凶星？姉さんはかわいいねえ」

「ヨナさまっ！」

にやりと笑ったヨナにリンドは頬を染めたまま声をあげた。ヨナはそのままの表情で膨れっ面になってしまったリンドにごめんごめんといいながら手を伸ばす。リンドの黒髪に手を添えると先ほど手折った大輪のアストリアを挿して満足気に似合うよ、と言った。ヨナの行動の早さにリンドは何とも言えない表情になったが、ありがとうございます、と何とか礼は言った。

光のような、とヨナが評したアリオス皇子は実際はどんな人な

のだろう。といつても自分よりひとつだけ年上のアリオスはまだ少年、と言つべきか……。リンダは前に個人教師のリーナスからリクスル宮廷に住む王侯貴族の肖像を見せられたとき、皇王家の肖像画も見たことがある。そのときはたいして気を払っていなかったためにアリオスの顔もおぼろげにしか覚えていない。ただ　冷たい美しさを醸し出していた紫色の瞳だけはなぜか印象に残っている。さつきヨナにアリオスの話を聞いておぼろげな記憶とその話を照らし合わせていたが、想像することは難しかった。

（光の、皇子さま……）

どんな方なのだろう。

「リンダ？」

ヨナの呼びかけにリンダははっと我にかえり、ヨナに視線を向けた。

「……はい？」

「また皇子さまのことを考えてた？」

さつきからかつてきたときは違い、真顔で問い掛けてきたヨナにリンダは思わず素直に頷いた。

「そんな心にはひっかかるなら、皇都行き、いつそ受諾してもいいと僕は思っけど」

「……」

「だって君、僕が呼ぶまで今まで見たことがない表情かおしてたよ」

「そう……でしたか？」

うん、と頷くヨナを見てリンダはキノワの湖面に視線を戻す。

心にひっかかるなら、皇都行き、いつそ受諾してもいいと僕は思っけど

確かに、先ほどヨナに指摘されてから……いやアデイスに皇都行きの話聞いてから、まだ見ぬアリオス皇子のことが頭から離れなかった。会ったこともない人のことをどうしてこんなにも考えてしまうのかまだ幼いリンダにはわからなかった。一度指摘されてしまうとますます頭の中は皇都行きの話でいっぱいになり、リンダは何かに突き動かされたように思わず口を開いた。

「私…お受け、して、みようかな…」
それは 無意識だったのかもしれない。気がついたら、口からす
るりとその言葉が出てしまっていた。

一章 帰郷・5（後書き）

更新しました。ヨナさまの性格が書いていてどんどん変わっていきます…

余談ですが、アリオスを主人公にした外伝<闇の微笑>を近々アップする予定です。
まだ正式に登場していないアリオスの過去を描きます。リンダは出ません。

闇の微笑 アリオス十二歳

皇子よ、よく覚えておけ。神に選ばれた人間は哀れで薄幸なのさ。

「兄さま……」
聞こえた、己を呼ぶ細い声にアリオスはつぶついていた目を開く。うつとりするような、だがどこか暗い色を含んだ冷たい紫の瞳が声の主を探すように動き、アリオスは柔らかな芝生から身を起こした。首だけ振り返ると、少し離れたところから大きな紫の瞳を見開いて己を見つめる幼い弟の姿がある。

「…アスエル」
アリオスの呟きにその少年 アスエルは兄皇子に、胸に手を当てて皇族の礼をした。弟の礼に軽く手を振って応えたアリオスは、弟に目でもつと側に寄るよう促した。アスエルがおずおずとアリオスに近づくと、アリオスは弟を静かなまなざしで見上げた。

「アズ（アスエルの愛称）…おまえ、供もつけずにどうやってここに来た？」

リクスル皇国、皇宮カルメルの一角にある第一皇子宮のアストリアの庭園。ふたりの皇子たちは、庭園に咲き誇るアストリアの花々に囲まれながら向き合っていた。その庭園は、皇子宮を囲むように円環状に建てられており、主の気難しい気質を反映してか、初めてこの庭園を訪れる者にとっては美しくもどこか神殿に居るかのよくな錯覚に陥る雰囲気の漂う空間になっている。今ふたりが居るの

は庭園の中でも奥まった、皇子宮に比較的近いところでアリオスは人払いをしていたためかふたりのほかには人の気配がない。アリオスが横たわっていたのは庭園の中でも際立って大きく見える巨木の側で、今日のように天気に恵まれた日に芝生の上に寝転がり、空を見上げるのが皇都に住むようになったアリオスの習慣になりつつあった。…そうしているうちに暖かい日の下でうたたねをしてしまうのだが、アリオスはむしろそれを好んでいるようであった。

アリオス皇子とアスエル皇子。

大国リクスルの皇王家の直系の皇子たち。アリオスは十二歳、アスエルは十歳になる。

兄皇子アリオスは、漆黒の、黒曜石のような髪を持ち主だ。この国、いやこの大陸では黒髪は大変珍しい色であった。

リクスル皇王家の血をひく者たちが受け継ぐ紫色の瞳は煙るような瞳で、同時に鋭い磨きあげた剣の輝きを宿らせている。母似の美貌を持つアリオスは、その瞳のおかげである種の冷たい雰囲気を漂わせていた。

弟皇子アスエルは、やわらかい質感の金髪に、アリオスと同じ紫色の瞳の持ち主だ。ただ、アスエルの瞳は兄皇子に比べてどこか親しみやすい色だったが。

(でも 僕は知っている)

アリオスの瞳に、アスエルと話するとき 家族と接しているときに限らないやさしさが秘められていることを。

現にこうしてアスエルと向き合ってくれているアリオスは無表情ではあったが冷たい雰囲気はどこかやわらいでいた。

兄皇子の深い色の瞳に目を奪われていたアスエルは兄に問い掛けられてはっと目を見開いた。が、気まずい表情になり、うろろると視線を彷徨させたが、じっと待つアリオスの無表情な顔に根負けしたのか諦めた風に口を開いた。

「ああ…ええ…そのう…：…抜け出して来てしまいました…」
「……………おまえは三日前から熱を出して臥せっていたと聞いているが」

「大丈夫、です！僕、昨夜には熱は下がりました！」

頬を紅潮させて言葉を紡ぐ弟を、アリオスはぴしゃりと言い放つ。

「だからって誰にも言わずに抜け出すのはよくない。…おまえは、世継ぎの皇子だ。おまえから目を放した、として罰を貰うのは召使たち。…周りの者に心配をあまりかけるな」

「……………はい。ごめんなさい兄さま」

アリオスの、妥協を許さぬ叱責の籠もった声の響きと言葉にアスエルは僅かに青ざめながら目を伏せた。幼いながらも、異母兄を崇拜するアスエルにとってアリオスに軽蔑されることは死よりも恐れていることだったのだ。落ち込んでしまった小さな弟の姿に、アリオスは微かに口もとを緩めるとふうつと息を吐いた。

「分かればいい。…ほら」

アリオスは意識してやさしい口調でアスエルに話しかけてやると、己の身体の横の芝生をぼんぼんと叩いた。アスエルは兄の真意が読めず、途方にくれた顔でアリオスを見返した。

「俺の隣に座って。…ほら早く」

アスエルは最初、ぼかんとした顔になりアリオスを凝視したが兄に隣に座るのを許されたのだ、と理解すると顔を綻ばせていそいそとアリオスの隣に腰をおろした。

兄　アリオスは、アスエルを座らせると再び芝生に寝転んで空を見上げていた。もともと無口で進んで自分から話そうとはしないらしい兄の気質を、アスエルは兄に初めて引き会わされてからぼんやりとだが理解し始めていたのでこの静かな空間はさほど苦痛ではなかった。アスエルは膝を抱えてそっと兄を盗み見ていたがしばらくしてアリオスを真似てやわらかな芝生に、兄の方を向いて寝転んだ。自分と同じ皇王家の紫色の目は何を思っているのだろう。美しいが

愛想のない皇子　二年前、クルテア離宮から皇宮に迎え入れられたアリオスが、高位貴族たちにお披露目されたときにある貴族がアリオスを、こう評した。妾腹ではあっても、もともと美男美女揃いのリクスル皇王家の血をひく皇子であることに間違いない。アリオスは当時十歳だったが、そのあどけない、生母のユリア側妃似の顔はいずれ気品のある美しさを醸し出すであろう片鱗を見せつつあった。

らしい。というのはこの話、アスエルの面倒を見る侍従や侍女たちが話してくれたものなのだ。アリオスに初めて引き合わされたとき、アスエルがまだ八歳だった。その日はアリオスの十歳の誕生日と、アリオスを第一皇子として正式に国民に公表する日が兼ねられていてその日の夜は盛大な宴が　庶子とはいえ、大国リクスルの直系の皇子のお披露目なのだから　催された。

だが、アスエルたち皇族　自分と皇王ユリシス、皇妃アヴィーナ、皇女ルイシア、アリオスの生母の側妃ユリア　は第一皇子生誕祝祭の前日、内々に家族だけでアリオスに引き合わされていた。

（最初は、この方が僕の兄さまなんだと信じられなかった…）
アスエルはぼんやりと考え込んでいるうちに己がうつすらと、だが確実にまどろみはじめていることに気付かぬまま、＜あの日＞に想いを馳せた。

（あの日はとても不思議な、でもあたたかな気持ちになれた日だった…）

そこまで考えたアスエルは、だんだん重くなってくるまぶたの感触に気が付き、目を開けていようとしたが穏やかなまどろみへの誘惑に負け、目をつぶった。

アスエルの意識は深淵へと沈み、二年前の＜あの日＞へと舞い戻って行った。

「……ズ、アズ」

アスエルは姉に小さな声で話し掛けられている、ということによ
やく気付きハツと目を上げた。

「あ……」

ぼんやりと佇んでいた弟の意識がこちらに向いたことを確認したの
か、ルイシアは曖昧な表情で弟を見やった。

「ぼーっとして……どうしたの？」

「あ……はい……そのう、兄さま……はどんな方なんでしょうって考えてい
ました」

皇宮カルメル皇王宮の最深にある、皇王ユリシスの住まう主
宮殿。

その、皇族と一部の者のみ出入りを許される主宮殿の皇王の私的な
居間で皇女ルイシア、皇子アスエルの姉弟は両親とともにくつろい
でいた。もう夜はとくに更けており、幼い姉弟が起きているには
少々遅い時間ではあったが今夜は姉弟にとって、いやふたりの両親
たちにとっても大切な日であったので幼い姉弟もここに居ることを
許されていた。

今日は、遥かなクルテア離宮で養育されていたふたりの腹違いの兄
弟、アスエルにとっては兄にあたるアリオス・エル・リクスル第一
皇子が数日後に執り行われる十歳の誕生日を迎えるために皇都に帰
還する、近しい家族にとっては待望の一日であったからだ。

アリオス・エル・リクスル。第一皇子、第二皇位継承者。皇王ユリ
シスの長い間秘されてきた、妾腹の長子。

皇王ユリシスとその側妃ユリアとの間に生まれたアリオスは、皇室
規範に従ってクルテア離宮で家族と離されて養育されていた。庶子
であり、そのうえ、森ノ民の血をひくアリオス皇子に第二皇位
継承者という極めて重要な地位を与えるという皇王の決定に異を唱
えた者は少なくなかった。皇太子のアスエル皇子は病弱で、やさし
い気質で万人の認める為政者にはられないだろう。ともっぱらの
評判だった。もしアスエルが死んでしまったときは、と密かに邪

推し、庶子を第一皇子の座につけることに反対する宮廷の口さがない者たちを皇王ユリシスは時間をかけてなだめ、情理をつくした言葉で説き伏せてこの件を進めた。

ともあれ。恐らく、純粋な意味でアリオスの皇都入りを心待ちにしていたのは家族たちだけだっただろう。

この居間には皇王ユリシス、皇妃アヴィーナ、皇女ルイシア、皇子アスエルしかいない。侍従たちも先程、アリオスの皇宮到着の報があつてから下がらせた。アリオスの生母の側妃ユリアはいない。側妃宮でひっそりと息子の到着を待ちわびているだろう。……ユリアが皇王の居間にいないのはユリア本人が丁重に固辞したことが大きな理由だが、身分の劣るユリアが皇王の神聖な居間　皇王の居間は通常臣下の集う謁見の間とは違い、皇族や皇室補佐官が使う私的な空間なのだ　に入ることに異を唱えた者がいるのも事実である。

「カストール公爵、皇室補佐官、アデイス・レイ・ヴィランさま」

触れ係のよく通る美声が、来訪者の名を告げた。そして

「第一皇子、第二皇位継承者、アリオス・エル・リクスル殿下」
その名前にユリシスは一瞬目を閉じ、深々と息を吐く。

「通せ」
皇王ユリシスの入出を許す言葉に、豪奢だが品のある扉が開いた。

「…え？」

アスエルは、気がついたら腑抜けのような顔で眩いてしまっていた。

（この方が）

リクスル皇王家の血をひく証である紫色の瞳がアスエルの声にびく

りと反応し、緩やかにこちらを見た。

(僕の、この世でたったひとりの兄さま…)

その少年は、美しかった。まだ幼い、あどけなさの残る顔ではあったが鼻筋の通った綺麗な顔であり、形の良い眉、切れ長の紫色の目、くつきりとした二重まぶたなど、どこをとってもリクスル皇王家の<青い血>が生み出した神の芸術作品であることは一目瞭然であった。

だが、ひとつだけ見慣れぬ色があった。アリオスの肩の少し上で切りそろえた髪の毛は、艶やかな黒髪だった。この髪こそ、アリオスが<森ノ民>の血もまたひく存在である、という証拠である。

アリオスはこちらを見ていたが、ふと視線を父に移した。

「父、上」

ややかすれた、だが人を落ち着かせるような不思議な響きを含んだ声が紡がれた。ユリシスは息子の呼びかけに、喜びとためらいが混在する表情を浮かべた。そっと佇むアリオスの前に立ち、床に片膝をついて息子と視線を合わせた。

「私を父、と呼んでくれるのか」

「俺の父上は、父上だけです」

いきなり片膝をついた皇王のさまにアリオスは戸惑ったような表情を浮かべながら答えた。

「だから…」

言いよどんでしまったアリオスにユリシスはやさしく微笑み、肩に手を掛けた。

「おまえは私のかわいい子どものひとりだ。…そうだね、おまえの家族を紹介しよう」

「さあ。…お兄さまですよ」

母のアヴィーナ王妃に促されてアスエルはおずおずと進み出て胸に手を当てて頭を下げた。恐らく隣では姉も皇女の礼をしているだろう。

「ルイシアとアスエル」

おまえの姉と弟だ」

「姉、上」

アリオスはその言葉の響きが新鮮だったのか姉上、姉上と口の中で呟くとルイシアに目を向けた。ルイシアは嬉しそうに微笑み、よろしくねとやさしく言う。

「アス、エル？」

アスエルはそつと呼びかけられ、びくつと身体を震わせると兄を見上げた。神秘的な紫色が目に入り、口の中がカラカラに渴いていることに気付いたアスエルはごくつと唾を飲み込みかねてから心に決めていた、兄にあつたら真つ先に言おうと考えていた言葉を発した。

「
」

…あのとき、僕は兄さまになんて言ったんだっけ…？

- - - - -

アリオスは、横たわって空を見続けていたが弟が眠ってしまったのに気付いて体をゆっくりと起こした。脇に置いていた上着を手に取り、身体をまるめて寝ているアスエルに掛けてやると弟をじつと眺めた。

顔色は、若干青白い。だが熱が下がったというのは本当のことらしい。

弟のやわらかな質感の金色の髪の毛の乱れたところを直してやると、弟の髪に触れたまま、視線を向けぬまま前方にあるイラスの茂みに向かって声をかけた。

「…で？いつまで見ているつもりだ」

「おや。…人間にしては骨があるとみた」

何処か　面白がっているような響きの、…いや、揶揄する調子を含んだ言葉にアリオスは眉をあげたがすやすやと眠る弟を護るように前に出ると傍らに置いていた短剣を自然な、そうと感ぜさせない様子で手もとに引きつけた。

「おっと。その物騒なものは抜くなよ…」

その声は油断無く周囲を見回していたアリオスの耳に不意に届いた。驚くほど身近な距離でささやかれたことに　懐に何時の間にか入り込まれていたことにアリオスが気付いたときには声の持ち主は短剣の柄に置かれているアリオスの右手を押さえ込んでいた。

アリオスは右手にかかる力の強さに微かに呻き、相手を見上げた。声の持ち主は全身を黒い　闇に溶けるような色のフードつきのマントですっぽりと覆っていた。背は、アリオスの身体を封じるためにしゃがんでいるためにわかりにくいがアリオスよりは大きい。顔はフードに隠れていて見えない。恐らくまだ少年だろう。…不意に右手から圧迫感が去り、視線を降ろすと手の拘束は解かれ、短剣が抜き取られていた。

「これは預からせてもらう。…何、ほんの少しの間だけのことさ」少年は手の中できると短剣を器用に回すと懐にしまいこんでしまった。

「……………」

「そう睨むな、皇子よ」

「……………」

皇子よ、と軽く呼びかけられたアリオスは動揺は微塵も表さぬまま、だが警戒心をあらわにしたまなざしで少年を睨んだ。

「…何者だ」

暗殺者の類の襲撃を受けたのはこれが初めてではない。　だが、この少年は何かが違う。…それは確証のない、直感的なものではあったが、この少年の身に纏う空気は人間的な、　凡庸なものが一切欠落しているように感じた。

「俺か？俺は」

言いかけた彼は、ああ忘れていたと呟いて顔を隠していたフードに手をかけた。ゆったりとした動作でフードを払いのけ、ゆるりと軽く頭を振った。

紅い 人間は決して持ち得ない、異様な美しさを備えた紅い瞳がアリオスを見下ろす。

アリオスは少年と目が合った瞬間、初めて動揺を顔に出した。

「……………」

「やはり驚くか。…確かにこの色は人間は決して持つことの出来ぬ、神の眷属の証だからな。…安心していい。皇子、俺は別におまえの命を取る気はないさ。ただ、…そう、俺は今日はおまえと話がしてみたくなつたからここに来ただけだ」

「…話？」

「まあ別に大神アリアンの託宣を告げに来た、とかそういうことではないぞ。それをするのは御使いのルスタの役目だ…」

少年は薄く笑ってアリオスの反応を見た。

この、自称『神』の少年は何を言っているのだ。アリオスは一瞬相手の神経を疑いかけたが少年の紅い瞳を目にして言葉を失った。アリオスとて古の時代から続く由緒正しき皇王家の教育を受けたひとりであるし、亡き母からの教えもあるために大神アリアンを敬う心は持つている。神は存在している。ただ見えないだけで。とある理由から、アリオスはそれを知っていたがあいにく今までの人生で神に出会う機会はなかった。千年前、<混沌の時代>と呼ばれていたとき人はまだ、神々と語らうすべを持つていたという。今それが出来るのほんの一握りの者たち。異能者と呼ばれる者たちと<森ノ民>だけ。その者たちが伝えた伝承によると神の血をひく眷属たちは皆紅い瞳をしていて、その色を持つことを人は許されていない。

信じざるを…えない、か…。

アリオスは一応の結論を心の中で着けると、まだ警戒の色を浮かべたまま少年の紅い瞳を覗く。

「……………」
「皇子、そう怖い顔をするな。美しい顔が台無しだぞ」

少年のからかいの含んだ言葉にアリオスはかつと頬を染めたが冷静を装った声で やや低めの、不機嫌があらわになった声だったが

訊ねる。

「あんたは何を話すために現れたんだ？」

「まあ何と言うか…有体に言ってしまうと世間話と忠告かなあ？」

「…は？」

「俺はこれでもおまえよりは長く生きているからなあ。だから…おまえに少し助言を

してみたくなった」

少年はにこりと邪気のない笑顔でアリオスを見返す。アリオスは段々自分がこの奇妙な少年のペースに乗せられていつていることに薄々とだが気がついた。

少年は黙って微笑んだまま佇んでいたが、ふとアスエルに視線を落とすとスツと無駄の無い動きでアリオスが立ち、アスエルの眠っている芝生に近寄るとふたりから少し離れたところに腰をおろした。

「ほら、おまえも座って。大丈夫、心配しなくともこの子には触れやしないさ」

アリオスの無言の意思表示に気づいたのかは分からなかったが少年は肩をすくめて言い、アリオスは弟を背にして座った。

「皇子、おまえはどうしてこの国の皇子として生を受けたと思う？…それはな、運命の神がおまえに宿命よなためを与えたからさ」

「宿命……」

「運命の神のカウンは　ああ、カウンは女神だ　　気まぐれでね。大神アリアンですら想像のつかぬことを考え出してしまふ女だ。おまけに怒りっぽくて嫉妬深い」

アリオスと少年の奇妙な語らいは始めてからそれなりに長く続いていた。…語らい、と言ってもアリオスはただ少年の口から紡がれる世にも奇妙な、神の語る神々への愚痴を聞いているだけだったが。今に至るまでアリオスは少年から今まで見聞きしたことのないさまざまな話を聞かされた。

「俺はどうにもカウンが苦手らしい。…カウンはな、人の運命を一身に引き受けている身だから人の一生を狂わせるくらいは簡単に出来る。…実際、あの女の気まぐれと嫉妬の所為で永遠に死ねない身体になつて彷徨う運命を与えられた少女もいた。その子は今もこの世界を彷徨つて自分の愛した青年の魂を探し続けているだろうなあ」

「俺にはよく、分からないが」

アリオスは延々と独白し続けている少年が感慨深げに呟いたあとに割り込んだ。

「ああ…ごめんな、普段こんな愚痴を言える相手は少ないんだ。おまえみたいに静かに聞いてくれる相手も。…そう、世間話もあつたがもうひとつ言わなきゃいかんことがあつた」

不意に少年は真面目な顔になるとアリオスに向き直つた。アリオスが無意識に身構えると少年は笑うでもなく、それまで浮かべていたからかいや明るさを一切排除した、奇妙な静けさをたたえたまなざしでアリオスの紫色の瞳を見つめた。

「これから」

とつくりとアリオスの無表情な顔を眺めると、少年はようやく口を開いた。

「これから俺が言うことを、どうか心のどこかに留め置いてほしい」

「……………」

「皇子よ、よく覚えておけ。神に選ばれた人間は哀れで　薄幸な

のそ」

このことを言ったときに浮かべた少年の微笑を、アリオスは生涯忘れることができなかった。

瞳のこの世のものではないあやしい紅さをも遥かに凌ぐ印象をアリオスの心に植え付けた、口の端にほんの少し浮かべた奇妙な皮肉めいた それでいてどこか憐憫を含んでいた微笑。

その微笑と言葉の意味を、アリオスは数年後に動き始めることとなる己の数奇な運命を受け入れて初めて気がつくこととなる…。

闇の微笑 アリオス十二歳（後書き）

更新が大幅に遅れました…。アリオスの過去です。といってもアスエルの回想や少年の登場でアリオスの影が薄くなってしまうことが…伏線もところどころにあります…。

自称「神」の少年はまた本編でも登場します。時系列的にはこの闇の微笑が一番古いです。

次話からは本編に戻ります。

一章 帰郷・6

「今みたい……美しいものを美しいと感じられ、隣には心から信頼できる者がいる。帰るべき場所がある……」

「……………」

「俺は、幸せなんだな」

……………

「ね、ミシエル」

「……………はい」

フェールン城にはアントーニア夫人の愛しむ温室がある。

公爵家の者たちの憩いの場ともなっているこの温室は、夫人のはからいで城に住む使用人たちにも開放されている。

温室の中にはリクスル皇国各地で見られるものから、隣国ローディアやライドールの珍しい花までが揃っていた。

リンダもまたこの温室に足繁く通うひとりであり、お付きの者を伴って温室で過ごすのはそう珍しいことではなかった。リンダはドレスを汚さぬよう慎重にかがみ込むと、自分より低い位置に咲く薄紅色の小さな花　ラティカをそっと撫でてふっと笑うと振り返り、律儀に離れて控えていたミシエルを見る。

「ごめんなさい。旦那さまの従者であるあなたの時間をとらせてしまつて……」

ミシエルは瞠目したが、いえ、と首を軽く振る。

「元々旦那さまにはお休みは頂いてましたし、」

あなたとお話できるのは嬉しかった。ミシエルは一瞬続けようか迷い、だが慎重に言葉を選び直した。

「…あなたのお召でしたから」

「…ありがとう」

リンダの礼にミシエルははにかみ、いえ、とちいさく呟いた。

「私ね…皇都へ行くの。…旦那さまと一緒に」

「え？」

ミシエルの怪訝な声色に気付いたリンダはぼつりぼつりと話し始めた。

アデイスに打診された皇都行きのこと、その内容が皇都に住む妾腹の第一皇子の侍女として皇宮へあがるものだったこと。そして自分は受諾する旨を昨夜アデイスに伝えたことをリンダはミシエルに告げた。

「そう、なのですか…」

リンダが　皇都へ行ってしまう。

ミシエルとてアデイスの侍従のひとりなのだから数日後にカストールを発つことになっていいる公爵について当然皇都へ戻ることになる。皇族は皇都では最高権力者であり、まして直系の第一皇子の側付きになるということは女性として将来を約束されたも同然だ。カストール公爵家もさらなる繁栄を約束されたのだろう。

第一皇子、アリオス・エル・リクスル。リクスル皇族の中でも飛び抜けて優秀で、そして飛び抜けて気難しい気質の皇子だとか。

アデイスの侍従とはいえ、平民階級のミシエルにとっては雲の上の人物に思えてしまう。

「お母さんはね」

リンダの声にミシエルは意識をリンダへと傾ける。

「『自分の心に従いなさい』　　そう、言っていたわ」

「ユリスさまが…」

ユリス・ベルデ。リンダの母で　　<森ノ民>。リンダと同じく黒髪に緑の目を持つ女性。

アントーニア夫人を貴族的な優美さを漂わせる女性と表現するならば、ユリス・ベルデという女性は春風のようなしなやかさを秘めた芯の強い女性だ。

<森ノ民>は一生を森で過ごす世捨て人、と世間では囁かれているが、ユリスを見るとそんなものは人々の噂のひとり歩きに過ぎないのだとミシエルは思う。

<森ノ民>とは、本当は陽気で歌語りや笛を好む心豊かな人々で<外ノ民>　　<森ノ民>は自分たちをこう呼んでいるらしい　　が評している神秘的な雰囲気や世捨て人、というのは真実の端くれに過ぎないのだという。

ミシエルの知るユリスは気さくでやさしく、ミシエルたち使用人たちにも心を砕いてくれ　　もちろん主と使用人の距離をかたく守る程度にだったが　　、それでて陽気さや茶目っ気さを会話の端々で感じさせることができる明るい目をした女性だった。

そしてその気質は目の前にいる少女も受け継いでいるのだ。

「ねえ、ミシエル」

「…はい、リンダさま」

「私ね、ヨナさまに皇都行きを勧められたとき、正直どうして受諾したいと思ったのか分からないの」

「……………」

「ただ…話を聞いていて、皇子さまに会いたい、そう思ったただけな

の。でも…私がお仕えする相手は…この国では至高の血脈の頂点に立っている方で、私は決して貴族ではないわ。カストール公爵の縁者のただの平民の小娘よ」

「いけませんっ！」

ミシエルは不意にリンダの言葉をさえぎり、常の彼からは想像もできない強い声を出した。

「あ…」

リンダが呆けたようにこちらを見つめているのに気付いたミシエルは青ざめて申し訳ありません、と小声でわびた。

「…自分を貶める物言いはおやめください。あなたは、あなたです。リンダさま」

「ミシエル」

「自分の判断が本当に正しいのか…それを迷わない人などいません。でも…明確な理由がなくとも…あなたはもう答えを出しているはずです。それなら…自分の心に従うべきです」

「自分の心に…」

リンダは胸に手を置き、呟く。

思いがけないミシエルの叱責に目が覚めてしまった気がした。ヨナに答えたときから心を占めていた奇妙な感触がほんの少し和らいだ、のかもしれない。

この時点では彼女自身、<どうして>かは分かっていなかっただろう。しかしこのときこそがリンダが皇都へ向かうと決めた理由をおぼろげながらも理解し始めた瞬間だったのだ。

一章 帰郷・6 (後書き)

やっと更新できました…放置すみません…
久々のリンダです。亀更新ですが次話からゆっくりとですが物語が
転換期を迎えます。

このミシエルとの会話がのちのリンダにとってある意味とても重要なものになる予定です。

二章 目指すは皇都アジエ・1

「人と分かり合うこと……それは他者を信じるということ」

紫色の瞳が、こちらを振り返る。無表情だけれど、やさしい表情を浮かべたアリオスはわずかに目を伏せる。

「今だから分かる……」

そっと、ささやくように言葉を紡ぐ。

「彼女は俺に、〈それ〉を、とても大切なことを教えてくれた。

だから……」

どこか、幸せそうに。

「彼女を幸福にしてやりたいと、そう思った」

アリオスは離宮のひとつ レヴィアル宮 の東屋に居た。

ここ最近皇子宮に籠もりきりの第一皇子を案じて催された今日の園遊会には多くの貴族たちが招かれている。湖に面して立つ庭園にはリクスル皇王一家をはじめ、身分ある者たちで満ちていた。

アリオスはアヴィーナ皇妃やルイシア皇女に再三説き伏せられ、実に半年ぶりに公の場に姿を現した。黒髪の第一皇子は注目を浴びている中で言葉少なに挨拶をのべると早々に姿を眩ませてしまったが、恐らくは今頃ラウあたりが姿を眩ませた自分を探しているに違いない。アリオスは東屋の壁に寄りかかり、腰をおろすと軽く息を吐いた。指を伸ばし、眉間にふれると肌を通して血管がぴくりと脈動した。…疲れていた、らしい。

ゆっくりと目を閉じ、息を吸い込む。視界を意図的に断ち切り、肩

の力を抜くと思いのほか穏やかな気持ちになった。風が通り抜けてさわさわと心地よい音をたてている木々や珍しい鳥の鳴き声…先程まで張りつめていた神経が緩やかにほぐれていくのをアリオスは感じた。

（最後にレヴィアルに訪れたのは…いつだったか…）

そう　半年は来ていなかった。最後にこの離宮で遊んだのはルイシアやアスエルや…母もいた。

確か今日のような催しはなく、皇王一家だけで訪れていたか。いたずら心が働き、侍女たちがおろおろする姿が面白くて姉とともに早駆けの真似事もした。まだクルテアに居た頃はアリオスはよく遠乗りに行ったものだが、ルイシアから、彼女が馬に触れ合うのは馬術の授業だけと聞きひどく驚いた自分を思い出した。

今は　とてもその気にはなれないが。

（俺は…何をしているのだろう…）

母を亡くし、家族の心労を増やし　それでも結局前に踏み出せずにいる。ふつと目を開け、視線を軽く上げると、この地方でよく見られる鳥の巣が視界に入ってきた。全身が白く、目の下だけ灰色のラインの入った親鳥がちいさな卵を懐にしっかりと抱えている様子がよく見えた。

おまえは結局甘えているのだ　心のどこかで酷薄な囁きが聞こえた。

（…分かっているさ）

分かっている。今の振る舞いが矛盾していることくらい。ひどく子供じみた愚かな振る舞いだ。自分の立場で許されることではない。だが、…それでも思ってしまうのだ。

(いや、俺が……ただ、人と関わるのを疎むようになった、
というだけか)
或いは。自分はある日に死んだのかもしれない。前に姉に洩
らした、あの言葉こそがアリオスの本心だったのか。
母のなきがらを目にしてからこの胸に宿る鬱屈とした感情がそう思
わせているのか…。

(…よそう)
考えても詮ないことだ。頭が酷く重く感じたためにアリオスは眉を
しかめ、壁に体重を預けきると目を閉じた。

皇子よ。おまえにひとつだけ良いことを教えてやろう。
ふと、いつかに出会った黒衣の少年の囁きがアリオスの脳裏を掠め
た。

それはね…

- - - - -

「そう、じゃあ一緒に行けるんだね」

ヨナは梱包しかけていた本から手を離し、リンドに目を向ける。リ
ンドはええ、と頷き照れたように下を向くと両手の指を絡めた。こ
の少女がその仕草をするのははにかんでいる証拠。
ヨナは口元を緩めると手を動かし作業を再開した。

「ユリスさまは…姉さんの背を押してくれたんだね」

「自分の心に従うように、と」

「心に従え、か…ユリスさまらしい言葉だ」

ヨナは少し変わった装丁の本の背表紙を指でなでると、リンダを振り返る。

「僕は姉さんが一緒に来てくれるなら嬉しいけど……あっヨーラ
ン！『ロイア戦記』はこっちの箱に入れて」

ヨナは振り返った先にいたリンダ　の後ろにいた侍従に声をかける。リンダもつられて振り返るとヨナに頷いている青年が心得たように手にした本をヨナの差した箱に入れ始めた。

「でも姉さんは、アリオス殿下の侍女になるんだらう？」

「…はい」

「カストール公爵家は宮廷での地位がそれなりに高いから…やっかみはあるかもしれないけど表だって姉さんを貶める輩はいないだらうね。　姉さんと殿下の血筋の事情が、無ければ…ね」

二章 目指すは皇都アジエ・1（後書き）

おまたせしました。二章に移ります。舞台はまだカストール。次か、その次にはアジエに舞台を移し…たいです（泣）早くアリオスとリンドラを会わせたい…。

ところでこの連載、1話1話の量は短め…でしょうか？そこらへんを知りたい今日このごろです。感想などでぜひ意見をお聞かせください！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4434i/>

リンダの翼

2010年10月31日08時04分発行